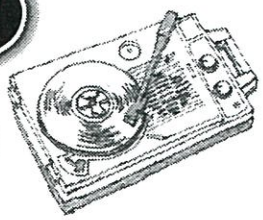
2017-10-5（木）発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

第8回 「薄幸の少女」の物語に心を寄せていた昭和の国民

堀井六郎
絵・松本 浦



『いつでも夢を』に端を発した、青春アイドル歌手によるデュエットソングの波は多くの名曲を私たちに残してくれましたが、書き忘れてはいけない歌はまだまだあります。

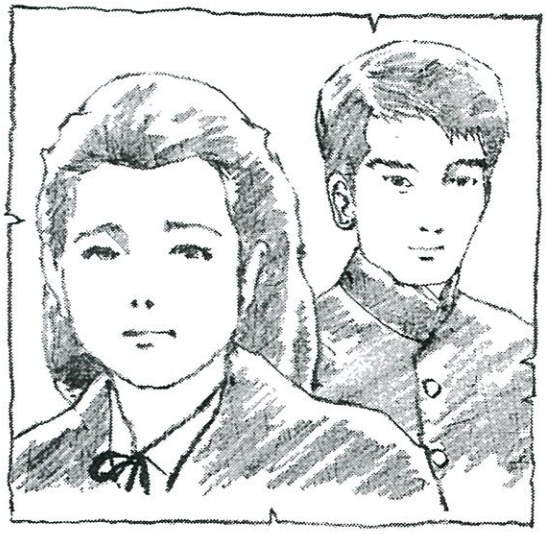
高田美和と梶光夫が切々と歌った純情実話歌謡『わが愛を星に祈りて』です（昭和40年9月発売）。発売元の日本コロムビアとしては、『星空に両手を』をヒットさせた島倉千代子＆守屋浩コンビよりぐっと若く、さらには本間千代子より年少の高田美和（当時18歳）に悲劇のヒロインを重ね合わせて売り出します。

高田の父親・浩吉は「歌う映画スター」のルーツのような存在なので、血は争えない、ということでしょう。

薄幸の少女をテーマにしている点では、青山和子が歌ってレコード大賞を受賞した、感動実話歌謡『愛と死をみつめて』、さらに遡れば、伊藤左千夫の名作『野菊の墓』の影がちらつきます。実際、『わが愛を星に祈りて』のヒット後、やはり梶との共唱で『野菊の墓』というオリジナル曲を発表しています。どちらも、作詞は岩谷時子の手によるものでした。

大ヒットした『わが愛を～』は、翌昭和41年3月、大映で映画化されます。主演はもちろん高田美和、相手役は山本豊三（高校生役ですが、このときすでに20代半ば。父は名優・山本礼三郎）。ついでながら、脚本は池田一朗、後の時代小説作家・隆慶一郎でした。『花の慶次』を世に知らしめた恩人ですね。

今あえて回想すれば、こうした純愛路線は、美樹克彦の『花はおそかった』（昭和42年3月）でピークを迎えることになる、と私は考えますが、『野菊の墓』を原作にした映画は、その後も、太田博之＆安田道代（昭和41年5月公開『野菊のごとき君なりき』）、松田聖子（昭和56年8月公開『野菊の墓』）を擁して、それぞれ、大映と東映で製作されています。



昭和という時代には、こうした薄幸な物語に心を寄せる国民性が、まだ映画としてたびたび興行に懸けられるほどには残っていた、ということでしょうか。

昭和42年1月、これも感動実話の原作に基づく映画『限りある日を愛に生きて』で、高田美和と共演した太田博之ですが、『野菊のごとき君なりき』の後、安田道代とのコンビで『若い時計台』（昭和42年5月公開。数寄屋橋にある岡本太郎作の時計台です）で再度共演、主題歌も安田とのデュエットソングとして作られました。

『若い時計台』の旋律自体は、典型的な青春歌謡になっていますが、『わが愛を～』の歌との間には、決定的な違いがあります。それは、伴奏にエレキギターとドラムスがフィーチャーされ、エレキ歌謡として作られている、という点です。

すでに歌謡界には、ベンチャーズとビートルズの影響で、加山雄三を筆頭とする「エレキ志向」という時代の波が押し寄せていました。

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。著書に『私的「昭和大衆歌謡考」』第1～3集（グスコー出版）がある